

地球で生きるための新しい倫理を模索しよう

—序に代えて—

Groping New Ethics to Live on Earth

Instead of Preface

木村 光伸

KIMURA, Koshin

東日本大震災からはや3年。その記憶がすでに風化しつつあるという。他方、原子力発電所の再稼働によるエネルギーの安定供給こそが日本経済再生のための最重要事項であるという論調は、多くの批判にさらされながらも、着々とその実現のための地歩を固めつつある。「まずは喰わねばならない！」という観念は、なにやら第二次世界大戦後の復興を思わせるようであるにしても、その内実は随分と違ったもののようである。3.11を考える視点はじつに多様に想定することができる。人間の予期するありようを超えるような巨大災害が現実起こりうることを、この日、私たちは実感した。阪神淡路やスマトラ沖など、身近に、また地球規模で、これまで私たちはたくさんのことを学んできた。しかし、それらの経験は今回の地震・津波・文明的構築物の崩壊という三点セットの災害ではほとんど役には立たなかった。いや、一部のボランティアの仕組みなどではこれまでの経験は大いに役立ったのだろうし、過去の経験（ひょっとすると思ひ出にすぎないのかもしれないけれど）の積み重ねはそれなりに意義のあることであったに違いない。ただし、その上での「未曾有」の事態であったのである。自然災害としての3.11は人智の及ばない世界の中で私たちが生きている（生かされているというべきか）ことを実

感させた。ただそれだけであれば、人々はもう一度自然との知恵比べとしての生活の復興をただちに模索し始めたことであろう。しかしそこにもう一つの難問が立ちはだかっていたのである。それが原発だ。東京電力福島第一原子力発電所で発生した状況は、災害を過去の概念とはまったく異なったものとして私たちに突き付けたのである。ここでいう私たちとは、被災した、あるいは避難を余儀なくされた人々のことではなく、さらにいえば日本人のことでもない。地球に生きる人間それ自体の存在に対して、3.11とFUKUSHIMAは何かを突き付けたのであった。それが何であるのかをめぐる意見というか、情念というか、はたまた怨念とでもいえばよいのか、いずれにせよ、私たちが簡単に「科学的」に検証し、反省し、再構築すれば、元通りの生活を再び謳歌できるというような類のものでない「何か」を、自然と人間存在との間に見出さざるを得なかったということだけは、多くの人々にはほとんど自明のことのよう受け止められたことであろう。それでも原発再稼働は「頑張れ、日本！」の基点にどっかりと居座り続けている。

総合人間学会は3.11以降、一貫してこの問題がもつ「人間存在と文明」への重層的な問いかけを、「人間学の本質」への接近機会として重要視してき

た。会員の思いは、まず「提言」（2011年4月16日）として公表され、2012年度の第7回研究大会のシンポジウム「3.11と総合人間学―人間（ヒト）・未来への選択」において討論され、その成果が『3.11を総合人間学から考える』（学文社、2013年）に結実して世に問われたのである。そこではこの問題を、科学固有の問題、科学を前提とした現代社会の問題、文明を推し進めてきた人間存在の意味、人間それ自体への自己評価と反省など、およそ私たち人間が過去の学問的成果として積み重ねてきた経験的知の体系全体を網羅して記述している、といってもよいほどに多様かつ多義的な議論が展開されたと私は考えている。ただし、歴史的に、かつ生物学的背景をもって構築されている人間行動の評価は難しい。その部分は、これまた総合人間学会では従来から問題視しつつ、十分には議論してこなかった人間の自己発展様式の問題すなわち「自己家畜化」をめぐる諸問題として取り上げられた。シンポジウムそれ自体は時間的制約の中で十分に議論を尽くすことが叶わず、私たちの学会が目指す「総合性」へのアプローチとしてはやや物足りないものでしかなかったけれど、その思考するところは翌年2013年度の第8回研究大会に継承され、シンポジウム「人間関係の新しい紡ぎ方―3.11を受けとめて」の開催を誘引したのである。

この第8回研究大会でのシンポジウム冒頭の短いオープニング・プレゼンテーションで私が強調したことがいくつかある。それが総合人間学会の共有する思念であるのかどうかは、本特集の各項を担当して下さったそれぞれの執筆者の論考から直接読み取っていただくことが望ましいのだが、まずは私なりの総括が必要なのであろう。私はシンポジウムのテーマを「人間と文明を問い直すために」と読み替え

て発言した。それは「人間関係」と呼称されるもの、それ自体が人間の生成物であり、その交錯した全体こそが社会であり、文明生活なのであるという認識に、私自身が立つからである。その「人間関係」は3.11以降の流行語となった「絆」や「思いやり」などという実体的に意味不明な言語によって支えられるのではなく、私たちが私たちを人間として為さしめて来た歴史的背景をもつ実体でなければならぬからである。「私たちはどこへ行こうとしているのか」という疑問はけっして「過去への撞着」でもなければ、「未来への言い知れぬ不安」でもなく、ましてや「自己決定不能な未定型の将来」などではあろうはずもなく、まさしく「いま生きることの意味」を問うているのである。3.11という経験を通して得た私の問題意識は次のように総括できる。①科学のおよび科学的信頼性ということへの無制限の揺らぎ、②極限的狀況下で生じる現実を直視することからの逃避、③記憶と記録の根底的な差異。そしてそこから浮上する④忘却が人間の救いなのかという疑念などなど。3.11以降、私たちが考え、行動してきたこと、あるいは反省し、再構築を目指したことの総体が、無自覚な自己家畜化の延長にすぎないとしたら、私たちの未来を操る術は私たちの手中には存在しないことになる。それは政治的な意見の違いや政策的対立、事例として挙げるならば「原発」を再稼働させるのか否か、次世代エネルギーを何に依存するのか、といったことがらの、いずれの立場に立つかに関わらず、いまの時代に生きている存在としての責任と無関係ではありえないのであろう。誰一人として責任から自由ではありえないのだ。

私自身のそういう想念の上に、私はさらに二つの問題として3.11に関係する議論の前提を提出した。それが「絆」の再検討と「止まらない欲望の連鎖と

しての文明」の再自覚であった。人間は繋がらなければ生きていくことができない。それを否定する人はいないと思うけれど、さて「繋がり」とは何かということになると百家争鳴に近くなる。しかしこれは生物学的背景をきちんと理解することでまずは一定の結論を得ることができそう。人間の「繋がり」は血縁を前提として成立している。そういう視点から見れば地縁などという関係性も疑似血縁なのだ。現代社会のいたるところで語られる人間らしい繋がりなどというものはすべからず「家族のように」という形容ですべてが尽くされるといってよい。しかし「他人」は「家族のように」は振舞えても「家族」にはなれない。そうだとしたら「絆」はどこまでも擬制的な結びつき以上のものではなさそうである。こういう言い回しは私の人間性を疑わせる恐れがあるので、少し付け加えておきたい。私自身は何も擬制的結びつきを意味のないものなのか、血縁に比して一段低いものかなどと考えているわけではない。それどころか、人間社会がそのような擬制的な結びつきで社会の安定した統合を図ってきたことに、人間の思惟の奥深さを感じているのである。サルたちの社会を研究してきた私をして「やはり人間は人間だよなあ！」という感嘆を吐かせる所以はそこにあるといってもよいくらいである。にもかかわらず、否それゆえに、私は「絆」に象徴される復興を否定するのである。その私なりの論拠はただ一点「私たちは同じ過ちを繰り返してはならない」ということに尽きる。さらに誤解を恐れずに言えば、3.11は私たち文明社会への天啓である。そこから私たちが何を読み取るかによって、私たちの次なる行動は、犠牲となった多くの「いのち」への鎮魂ともなるだろうし、性懲りもなく自己破綻へ突き進む私たちの文明の前照灯ともなる。いま私たちには「これから

の生き方」の選択が迫られているのである。もちろん社会経済のドラスティックな変動は人間生活のカタストロフィックな悲劇にもなりかねない。しかし考えてみれば、今回のように文明と文化生活手段に投げかけられた根底的な疑問などというものは、これまで私たちが経験しなかった類（かつて一度だけあったとすれば原爆開発であろうか）のものであり、文明とその基礎としての自己家畜化のプロセスを再考可能なものとして捉える絶好の機会なのではないのか。そのような時機にあっても、まだ現在の享樂的生活（しかも地域的民族的格差や同一社会集団内における差別的諸関係を前提にした豊かさ）を維持し続けるための選択肢探しに奔走するのはいかにも愚行ではないだろうか。さて、そのような私の疑問に対して、現代科学の世界はどのような解を準備することができるのだろうか。ここで私の文章が疑問形だらけになっているという事実は、私には素朴な疑問はあってもそれに対する回答を準備する能力が欠落していることの証左である。実に恥ずかしい。しかしそれを埋める多くの論考を今回の総合人間学会誌第8号電子ジャーナル版所収（第8回研究大会シンポジウムの特集）に寄稿された執筆者の皆さんは準備してくださった。

本特集は四つの章で構成されている。いずれの章も、3.11後の私たちのあり方を問うという意味では一つのものなのではあるが、その視点あるいは方法が少々ユニークかつ多様である。初めの章は「人間関係を問い直す」というテーマで纏められた。大災害を目の当たりにした被災現場の住民でもある岩田靖夫氏は、それでもなお繋がることの意味を問われた。渡邊毅氏はそもそも「人間関係」を論ずることの意味を霊長類と人類学の背景から論じられた。穴見慎一氏は第8回研究大会での論考をもとに執筆

された論文（『総合人間学 8』学文社，2014）をさらに進めて「自己家畜化論」を再検討することで主体的存在としての人間のあり方にアプローチしてくださった。その内容は「自己家畜化論における言語コミュニケーションの人間学的視点」を問うことの重要性の指摘するユニークなものとなっている。さらに「人間を問うことの現代的意味」という題の論文を寄せてくださった片山善博氏は、人間を見つめてきた哲学の歴史を背景にしつつ、「偶然」「自己と他者の関係の再構築」に基礎づけられた現代的視点に立つ人間理解の必要性を指摘されたのではないかなと思う。

次の章は「環境が編み出す人間関係」として纏められた。古沢広祐氏の「3.11 震災復興が問う人間・社会・未来―伝統文化の力，地域再編・漁業復興をめぐる相克：持続可能な社会を考えるために」と杉山光信氏の「中山間地域の地域振興」は、前者が被災地の人間関係の再構築としての伝統文化再生を取り上げ、後者は中山間地でのフィールドワークから得た生活実態を報告された。それぞれ地域で人が生きる現場を生き生きと描きつつ、これまで私たちがステレオタイプのように理解してきた地域という概念を人間の生きるあたりまえの世界として捉えなおして教示された。吉田健彦氏の「記憶と記録―現代情報メディアにおける他者の可能性について」は、これまた（『総合人間学 8』学文社，2014）への寄稿論文での主張をさらに明確にし、情報メディアが他者と持ち得るはずの「共同性」への疑義を焦点の一つに据えて検討されている。被災地あるいは被災者にとっての情報という「もの」を「記録と記憶」あるいは「固有性」というキーワードで切り取ることで、現代社会における個の期待や拒絶の問題に触れられたのだと解したい。さらに木下康光氏は

「来るべき社会のための覚書―〈存在の連鎖〉のもつ意味」で、宮沢賢治の「すべてがわたくしの中のみみなであるやうに、みんなのおのおののなかのすべてですから」という言葉を引くとともに、西洋思想にも論を広げて、結局は「存在の連鎖」という古今東西の思索の行き着く先を示し、すべての人間に「平和な共生の社会」への価値基準の転換とそのための実践を求めている。これも重い主張であると私には感じられる。

三つめの章は「人間関係の危機―疎外感に立ち向かう」というテーマで統一された。清真人氏の「イジメ共同体をいかにのりこえるか―基礎経験をめぐるヘゲモニー闘争の観点から」の論考が 3.11 との間で成立する関係は「いま緊急に必要とされているのは、われわれが実際に立たされている状況の生々しい相貌についての確認と共有化である」という氏の言葉に凝縮されている。人間関係のいかなる場面にあってもこの理解は根底的に重要であると私は共感する。共感するだけでなく、このような認識の欠如が、私たちの社会をギクシャクとさせ、「個」を「全体」と繋ぐのではなく、「個」の中に封じ込めて「精神的死」に至らしめているのだとさえ思うのである。3.11 の現場で横湯園子氏は心理臨床家として「3.11 その後」に立ち会われた。言葉を発することさえもはばかりられるような状況を経験されたようだ。地震・津波の被害者として世を去った者も、生き残った被災者も、そして引きこもり者からボランティアの道を辿った末に「自分も存在しても良いのだ」という自己感覚を得た青年も、災害で何かかも失い、そして災害から何かを得たのである。その記録はじつに重い。失礼と知りつつ敢えて書くのだが、シンポジウムの折に司会者として座していた隣で、講演者として語りながら涙された横湯先生の想

い（それはけっして私などの思い及ぶものではないのだが）を私はけっして忘れることがないだろう。

さて、シンポジウムでの発言とそれらを契機として記述されたこれらの文章を読み返してみて、「人間関係の新しい紡ぎ方」を問うたことの意義を、私は今更ながら頭の中で反芻している。日本中が「復興」という言葉で沸騰していた時、世界はどのような日本の状況をどのようにみていたのだろうか。最終章に寄稿して下さった水野邦彦氏の論考「韓国で受けとめた〈3.11〉」とミヒャエル・イエーガー氏の「ドイツにおけるエネルギー転換—その問題点と展望」は、「進め日の丸〈絆〉を守れ!」とばかりに平静な議論よりも日本的な生活（そんなものがあるのか?）の集団防御へと狂騒し始めていた私たちを客観的に捉えなおす精神安定剤となる。

3.11 が私たちに残したものはあまりにも大きく、また多岐にわたる。私はそれを生活のすべてにわたる反省と再検討と新たな展望の形成のための旅立ち（そのための旅日記の最初のページ）として理解して今日に至っている。私自身の決意としていうならば「地球で生きるための新しい倫理を模索しよう」ということだ。言うは易し、行うは難し。地球という星も人間という存在も永久のものではないということがすでに科学的には明らかである。だからこそ私たちはいまをよく生き、明日をさらによく生きられるように努力しなければならないのである。人間史に怠惰は似合わない。

木村 光伸（名古屋学院大学）